
学園ストーリー

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園ストーリー

【コード】

N8475P

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

学校生活の始まりです

1年4月8日

人物紹介

西藤越美 13歳

西藤和己 13歳

の双子の姉妹と

新垣正夫 13歳

新垣正一 13歳

の双子の兄弟の中学生活の話です。

他多数の学園の生徒と先生たち

本文

西藤姉妹と新垣兄弟はいつも仲良しの友達で何をするのもいつも一緒です。

しかし、中学入学の時に4人に聞いたこともない学校に行くことになりそこでは、魔法や魔術の勉強をしています。

でも4人には魔法や魔術の力はありませんので4人は驚き戸惑いました。

そこで、4人は考えて相談し、その学校に行くことに決めました。

そのこの学校の名前は古城魔術学校です。

教科は魔法と魔術合わせて26の教科があります。

1・基本魔法必須

2・火炎魔法選択

- 3・雷 魔法選択
- 4・水 魔法選択
- 5・氷 魔法選択
- 6・草 魔法選択
- 7・基本魔術必須
- 8・火炎魔術選択
- 9・雷 魔術選択
- 10・水 魔術選択
- 11・氷 魔術選択
- 12・草 魔術選択

の魔法か魔術のどちらかを選んで5つの属性の内最低でも1つの属性を選んでください。と担任の和水先生は言いました。

そこで、和己は魔法で火と水を選びました。越美は魔術で雷と水と草を選びました。

正一は魔法で水と氷を選びました。

正夫は魔術で草と火と雷を選びました。

4人はそれぞれ好きな

魔法と魔術を選びました。

次は、身体能力のテストがありました。

越美はLV1

HP	20
MP	14
攻撃	8
防御	9
特攻	8
特防	8
素早さ	8

と使える魔法は、

ホイミMP3 加速MP1

です。

和己はLV1

HP	14
MP	6

攻撃 10

防御 9

特攻 6

特防 10

素早さ 7

と使える魔術はなし

正一はLV1

HP	30
MP	25

攻撃 16

防御 25

特攻 38

特防 20

使える魔法は、

水平切りMP6

体当たりMP0

です

正夫はLV1

HP	24
MP	10

攻撃 9

防御 7

特攻 50

特防 28

素早さ 30

使える魔術は

全体火炎魔術MP1

です。

これで4人の能力と力がわかり、1年間はLv上げと基本能力の向上に充てるとのことです。

4月8日4人は入学式を迎えました。

そこで初めて他の学校の先生と生徒に会いました。

全校生徒は800人教師は60人で新入生は200人で代表挨拶はなんと正一です。

正一は

「えっ？ 俺？」と和美先生に聞きましたすると先生は

「ええ！そうです。早く前に行きなさい」

正一は「わかりました。」と言って校長先生のところに行き、「私たち新入生200人はこれからの学校生活を先輩や先生たちに指導してもらい、自分の力を伸ばしていきたいので厳しく優しく指導をお願いします。」

と言い挨拶をして自分の席に戻りました。すると先生は「Good Job」と言い親指を立てて正一に見せました。

入学式も無事に終わり、4人はそれぞれ違う教室に入りました。授業は基本的にはそのクラスで行うのですが、選択科目はその属性の教室に行き勉強をします。

1年4月入学式後、4月末まで（前書き）

4人は教室に入ったところから話は始まります

1年4月入学式後〜4月末まで

さて4人はそれぞれの部屋に入り、担任の先生からこの学校の諸注意を言われました。

「学校の3階の一番奥の部屋には絶対に行かないようにしてください。今のあなたたちでは、とてもかなう相手ではありませんので絶対に行かないようにしてください。自己紹介は明日行います、今日はこれにて終わりです。」と言い先生は教室を出ていきました。他の新入生と話をしたい越美は放課後に自分からクラスメイトに話しかけました。「私、西藤越美です。双子の姉妹で妹の西藤和己もこの学校にいます。よろしくね!」と言いました。すると、みんなから「よろしく」と言ってもらえて越美は嬉しくなりました。

越美は「明日からよろしく。さよなら」と手を振りながら教室を後にしました。

教室を出てから、皆を待っていると、隣の教室から和己が出て来ました。次に正一と正夫の順に出てきました。4人は仲良く学校を後にしました。

1週間たち、

この学校に通い始めて初めての休みになりました。4人は

「クラスメイトと遊ぼう」と言うことで、前日にクラスメイトに話しかけていました。1クラス30人の7クラスあり、4人のクラスメイトだけでも120人はいます。

そのなかで来た人は、72人と半分以上の人が来てくれました。4人はとても嬉しくなりました。

みんなで、仲良く学校生活について話したり、料理やゲームをしたりして、コミュニケーションをとることが出来て、4人はとても楽しめました。さて、4月も終わりに、近づき、テストの時期になり

ました。「今月の試験は、基本の魔法と魔術についてと選択科目の習ったところまでです」と先生は言いました。さらに、「実技も行いますので、復習忘れないようにしてください。」と付け加えました。

みんなは「ええ〜」と言つてため息をつきました。

この試験は学科は基本のステータスの向上が点数によって上がります。赤点は30点以下です。31〜40はすべてのステータスが1上がります。41〜50は2上がり、51〜60は3上がり、61〜70は4上がり、71〜80は5上がり、81〜90は6上がり、91〜100は7上がり、選択科目は選択した属性のLvを70点以上で1上がります。

テスト科目は全11種類あり、それぞれ、HP、MP、攻撃、防御、特攻、特防、素早さ、選択科目、基本の魔法か魔術、実技です。

実技はモンスターを先生が4体出し、それをどのように倒すのかわかる試験です。生徒は2人ずつで試験に挑みます。結果によって、ステータスが上がります。どれか1つが最低でも1最高で10上がります。

1年5月

テストが終わり、先生からテストの結果が返って来ました。

越美はHPのテストは56点、MPは80、攻撃は39、防御は74、特攻は57、特防は90、素早さは48、実技は79点で、素早さが5上がります。

和己は、HPは99、MP85、攻撃41、防御47、特攻97、特防100、素早さ31、実技は50でHPが2上がります。

正夫は、HPは29、MP100、攻撃15、防御100、特攻31、特防100、素早さ58、実技は100でMPが10上がります。

正一は、HPは95、MP60、攻撃31、防御28、特攻99、特防67、素早さ100、実技は47で攻撃が2上がります。さて、4人のステータスはどうなったのでしょうか？そこは、さておき、ここで、この学校で、あることが起こります。それは…

なんと、今までにはあり得ない！ことが起こってしまったのです。越美たち4人は他の先生から「急いで、この学校から出なさい」と怒ったように言われたので、4人は何が起こったのかわからない様子で、

「わかりました」と言っ学校を後にしたが、その帰り道、和己が「なんか先生たち慌ただしかったよね」「そうだね、なんかあったのかなあ」と正一が言いました。「ねえ、学校に戻ってみようよ」と越美が言うと正夫は何かに怯えたように皆に言いました。「皆、俺、なんかおもしろいよ、怖いよ、学校になんかおもしろいとつもなく、強い邪気があるよ。」ブルブル震えたすると、皆は、「何にも感じないよ？」

正夫、おもしろいんじゃない？」

正夫は「先生たちのあの騒ぎは絶対に学校になんかいるから、生徒全員に帰るように言ったんだろ？」と怒ったように言いました。

皆は戸惑ったような顔を見渡して、正夫の怯えた表情を見ました。

すると、なんと、他の3人にも背筋が凍るような寒気がしたのでこれは、本当に学校で何かいるのを、察して、学校の方を見ると、とてつもなく大きな、邪気を持った、モンスターが学校を呑み込もうとしているのを、先生たちが防御魔法と魔術を使って学校を守っているのが見えました。4人は、「先生を助けなきゃ！」と一致団結して、学校に戻り始めました。

すると、戻る最中にそのモンスターの手下が現れました。

4人の運命はどうなるのか？

4人は力を合わせてモンスターと戦ってなんとか勝つことが出来たのですが、4人は体力の限界に達してその場に倒れてしまいました。すると、クラスメイトが回復魔法を使ってくれて、4人の体力を回復してくれました。

クラスメイトの人の1人が「大丈夫？助けに来たよ。4人であのモンスターと戦うのは無謀だよ。みんなで作戦を練ってあのモンスターを倒そう？」と言いました。4人は「皆どうする？先生だって、学校を守るのが精一杯だよ。」「先生たちが守ってる間にみんなで一斉にあのどか物に攻撃を仕掛けて、モンスターの注意をこちらに引かせて学校から離そうよ！」「

すると、皆で「ああ、そうか、そういうことね。わかった。」「

皆で学校に向かいました。すると、モンスターはまだこちらには気付いていない様子で皆はそのモンスターに一斉に自分の持てる力を使って攻撃を仕掛けました。

モンスターはこちらに注意が来ました。皆はわかっていたかのように、次の作戦に移りました。作戦はモンスターがこちらに気付いたら、二手に別れて、攻撃を交互に繰り出して学校から離して行くことで、先生たちの防御魔法と魔術を攻撃魔法と魔術に集中してくれ

れば倒せるかもしれないので、それに賭けて見ようと言う作戦です。モンスターはこちらの攻撃に反応してこっちに来てくれてます。ここまでは作戦通りです。あとは、先生がどのような対応してくれるのか？

すると、先生たちは驚いたような顔をして、すぐにこちらの意図がわかったかのように、防御を解いて、攻撃に転じてくれました。生徒たちは「よしっ！あとは、先生たちに任せよう、自分たちは学校を守るぞ！」「おお〜」

と言って学校に向かい、先生たちの代わりに自分たちが張れる限界の防御魔法と魔術を使って、学校を守っています。先生たちは魔法と魔術を使って、強大なモンスターを倒してしまいました、しかし、かなりのMPを消費したようでなんとか立っている状態のようです。生徒たちは回復魔法を使って回復させました。

さて、モンスター騒ぎも終わり、生徒たちはそれぞれ家路に着きました。

4人は帰り道に今日あったことを話し合いして、自分たちはもっと強くなるうと心に誓ったのでした。

1年6月(前書き)

4人は学校から魔法世界に向けて準備をするところ

1年6月

越美と正夫と正一と和巳の4人は学校の授業でも、めきめきと頭角を表していき、どんどんレベルアップしていった。

先生たちは4人をみこんで、あることを言いました。

「君たち4人は今から、魔法世界に行き、そこで、いま、起こっていることで手を貸してほしい」

4人は「何で、私達何ですか？」と聞き返したが、先生は「あなた達なら、大丈夫と見込んでお願いしてるの。駄目？」

和巳は「わかりました。でも、私達、魔法世界のこと、全く知りませんよ。この学校もやっとなれたつてのに。」越美が「そっだよ。魔法もやっと思えるレベルなのに、大丈夫なのかな？」

先生は「あなた達はこの2ヶ月他の人の数十倍頑張ってます。自分の力を信じなさい。向こうの世界にアルスと言う方がゲートの出口に居ますので、その方を訪ねなさい。」では、魔法世界に向けて、4人は準備を始めた。出発は3日後の午前8時学校のゲートポートから魔法世界のゲートポートに繋いでくれました。4人の新しい旅の始まりです。

新たなる旅の始まり

4人はゲートポートで魔法世界に着きました。魔法世界のことは、全くわからないので、先生が言っていた、アルスと言う人を探しました。しかし、特徴とか、聞いていなかったため、闇雲に探す他ありません。そこに、1人の魔法使いが4人に近づいて来ました。4人はその魔法使いに聞きました。「アルスって方を探しています。どこにいるか知りませんか？」魔法使いは「自分がそのアルスだよ。君達のことは、先生から聞いているよ、かなり優秀みたいだね。さて、君達はなぜ、こちらの世界に連れて来られたか、まだわからないだろう？」4人はうなずきます。

「君達には我々魔法使いが持つていないものを持っている。それがこの魔法世界を守る鍵となるのだが、4人の顔を見ると、まだわかっていないみたいだね。」

4人は首を傾げていたので、アルスは、ため息をつきました。

4人はそれを探す旅に出ると言いました。アルスは自分もついていくので、安心してほしい。先生の頼みでもあるのでね。

4人は「わかりました、私達が危なくなったら、お願いします」では、

「世界を守る鍵を探す旅に出発！」

「ってどうか自分探しの旅だろ」

「そうだよ、アルスが私達の中に鍵があると言っていたもんね。」と正夫と越美がいいました。

さて、まずは買い出しです。

必要な装備や回復の薬などをアルスが揃えてくれました。

新しい町 ベットタウン

5人は旅を始めて初めての町ベットタウンに到着しました。

そこで、新しい魔法が覚えられると言うことを聞いた5人は、この町の町長さんに会いに行くことにしました。町長さんの所に到着し話を聞きました。

「では、どんな魔法が使えるようになるんですか？」

「使える魔法は3つのうちどれがいいか、選んでね！」

1つ…炎の魔法火炎の息

2つ…氷の魔法氷結の息

3つ…雷の魔法ライトニング

では、どれが良いですか？

越美は、炎の魔法を選択しました。

そして、30分経過越美は火炎の息を覚えた。

実践で使いたいと言う越美は正夫に勝負を仕掛けました。

正夫は勝負を受けました。

越美の攻撃火炎の息を発動、正夫は防御した。5ダメージを受けた。

正夫の反撃、雷の魔法ライトボルト発動、越美は魔法防御雷半減を使って正夫の攻撃を半減した。3のダメージを受けた。越美の攻撃炎の剣ファイヤーソードで斬りつけた。正夫は、雷の剣をライトニングソードを出して反撃をしたお互いに30のダメージを受けた越美は火炎の息を使いさらに、ファイヤーソードで強化し正夫を斬りつけた。50のダメージを受けて正夫は倒れた。越美はレベルアップした。

神の城が立つ。ワイドスクラップタウン(前書き)

約8ヶ月ぶりの更新です

神の城が立つ。ワイドスクラップタウン

5人はベットタウンから北東に進み、ときより、モンスターと戦いながら、次の町ワイドスクラップタウンを目指した。4人の仲は、以前にもまして、良くなり、雑魚モンスター等は、殆んど一撃で倒せるほどのレベルになっていたので簡単に次の目的地に着きました。

越美：「やつと着いた」

正夫：「そうだな。でも予定より早く着いたな」

正一：「でもついて良かった。体力もう残ってないよ」

和己：「お疲れ様。何か食べにいこうよ。体力回復も兼ねて!!」

みんな：「いいね！行こう！アルスさんどこかいそこありませんか？」

アルス：「みんな、何を食べたい？食べたいもの挙げてみて」と聞かれたのでみんな口々に言った。

越美：「私、カレー」

正夫：「うどん。」

正一：「唐揚げ定食」

和己：「私は、ハンバーグ食べたい。」

アルス：「みんなの意見を参考にすると、あそこしか無いな。」

みんな、私の後についてきて

みんなはアルスのあとをついていった。

歩いて、5分ぐらいだろうか、ファミレスみたいなところにアルスが入って行った

みんなはアルスのあとに続いて中に入った。

アルス：「ここなら、さっきみんなが食べたいメニュー全部あるから安心して」

みんな：「はい」

みんなは食べたいメニューを注文した。

料理がくるまでの間、アルスが聞いた。

アルス：「みんなの魔力ってどのくらいあるのかしら？」

越美：「そうですね、調べて見ないと正確な数値はわかりませんが、

私は、200位はあると思います。」

正夫：「俺は、だいたい、150ですかね。」

正一：「僕は、110位は有ります。」

和己：「私は、220はあるかな？」

アルス：「なるほど、女性陣が魔力はあるということだな。」

神の城が立つ ワイドスクラップタウン2

アルス：「では、女性2人なら、この魔法は使えるかもしれないな。」
越美、和己：「？」と首をかしげた。

アルス：「私が、何をいつているのかわからないだろう。では今から、お見せしよう。」

とは、言っても今は、ファミレスだから、ご飯を食べてからだな。」

4人：「はい」

と返事をして、ご飯を食べた。

ご飯を食べた後、5人は、近くの公園に来ていた。

アルス：「この魔法は、味方に魔力を与える力がある。しかし消費魔力が激しいからな。魔力が多いほうがいいのはこのためだ。それに、今までの2人の戦い方を見ていたら、男子二人のサポートするほうがいいと思うんだ。」

越美、和己「わかりました。教えてください。」

正夫：「頑張れ、覚えたら、これからは援護をたくさん頼むぞ！」

正一：「そうだな、ぜってー覚えるんだぞ！」

と男子2人が言った。

アルス「では、呪文を2つ教える、1つは、魔力回復魔法ヒートキユア、2つめは、体力回復魔法プリズンビート。先に言っておくが2つとも消費魔力は40を超えるからなけど一度使えば5回戦闘まで攻撃がヒットするたびに回復する代物だ。詠唱は

（我に力を与えん、ヒートキユア、味方に与えるプリズンビート）だ。」

越美：「詠唱は簡単だね。早速やってみるよ。正夫私のパートナーになって。」
と正夫に聞いた。

正夫：「いいよ、正一、相手を頼む。」

正一：「オツケーでは、こっちは和己パートナーよろしく」

和己：「わかつたいいよ。」

男子2人「では、行くぞ！」

女子2人「私たちの魔法いくよ。我に与えんヒートキュア、味方に与えんプリズンビート！！！」

女子2人「何この技、想像以上に魔力消費激しいジャン。あとは、任せたよ」

男子2人「おう、2人の力、存分に使わせてもらっぞ。いくぞ」

正一：「俺から行くぞ、雷の魔法稲妻ショット。」

正夫：「読んでた。けどこのダメージは受けよう。シールド雷半減発動」

正一の魔法は半減されて正夫にヒットした。ヒットしたことによってヒートキュアのスキルが発動する

正一：「魔力かくにんしていいか？」

正夫：「ああ、いいぜ。」

正一の魔力は消費が10だからどのくらい回復したのか確認しよう。魔力を確認したら6くらい回復していた。

正一：「かなり、魔力回復しているぞ。お前も攻撃してみる」

正夫：「おう、水と草の合わせ技、ウツクスプラッシュウォーター」

正一：「さっきのお返しでこちらも受けよう。マジックバリアホーリーブロック」

正夫の攻撃はヒットはしたものの、殆んどダメージを受けていないみたいだ。

正夫：「魔力の確認」

正夫の消費魔力は25、魔力を確認したら、12回復していた。

男子2人：「魔力半分位はかいふくしたな」

体力も全快になった。とはいっても、お互いにシールドでガードしたから、あまりわからなかったみたい

越美：「すごかったよ、アルスの話だと後4回は大丈夫っていつて

たから」

正夫：「越美は大丈夫か？かなり消費したんだろう？魔力」

越美：「うん、かなり消費大きかった。」

と笑顔で言うと

正一：「和己は大丈夫？」

和己：「うん、心配してくれて、ありがとう。」

アルス：「終わったかな、では、神の城にでも行くとするか。」

4人：「神の城？」

アルス：「そうだ。このまちのシンボルだから行ってみる価値はあると思う。」

5人は神の城に向かって進んで行った。

神の城が立つ ワイドスクラップタウン2 (後書き)

次回「神の城の中で」

神の城の中で

5人は神の城に向かった。

アルス：「この城はとてつもなく強い力で守られている。お前たちの力をもつてしてもかなりきついと思う。まずはじめに、危ないと思っただけに引き上げるからな。」

4人：「わかりました。」

神の城の入り口に近づいた。神の城はとてつもなく大きな城で、かなり強固なシールドで守られていた

正夫：「さすが、神の城と言われるだけはあるな。」

正一：「そうだな、でも、シールドどうやって解除するんだよ？」

正夫：「あつ、そうだよ。アルスさん、何か知りませんか？」

アルス：「すまん、私もよくは、わからないんだ。しかし、こんな伝説がある。」

神の入り口には聖なる力の持ち主の前に現る、聖なる力の持ち主には邪悪なる力の持ち主が不可欠だ。

交差する力の間には神の入り口現る。とな」

越美：「意味わかんない」

和己：「そうだよ、やはり難しいよ、今回はあきらめましょ。また来ればいいでしょ。もしかすると

ほかの町に行けば、なにか手がかりがあるかもしれないよ。」

正夫：「そうだな、そうするか、聖なる持ち主と邪悪なる持ち主を探さないとな」

正一：「ダメもとで、近づいてみるか。」

そういつて、正一はシールドに近づいた。すると、シールドを守るモンスターが現れた。

正一：「いきなりかよ！雷の魔法ライトニング！」

モンスターは攻撃を受けたのにもかかわらず、全くダメージを受けてないみたいだ。

正一：「何？効いてないだと！ならこれならどうだ。右手に現れよ雷の剣ライトニングソード！」

正一はモンスターに向かつて剣を切りつけた。モンスターは、その剣をシールドで弾き返した

モンスターは火の魔法ファイヤービームを繰り出した。

正一はモンスターに近すぎていたので、もろにダメージを受けてしまった。

正一：「くっ、俺の攻撃が通用しないだと！」

正夫：「助太刀する。草の魔法ウツドスプラッシュ」

モンスターは先ほどの技ファイヤービームでそれを打ち消した。

正夫：「このモンスター、頭がいいな、ならこれならどうだ！闇の魔法ダークホール」

正一：「闇の魔法だと」

モンスターは闇半減シールドを繰り出したがあまり効果がなく大ダメージを受けたようだ。

正一：「まさか、お前が闇の魔法を使うとはな、次で決めてやる。

光の魔法シャイニングホール」

正夫：「光の魔法……」

モンスターは光の魔法をもろに受け倒れた。

越美：「もしかして、正夫が邪悪なる持ち主で、正一が聖なる持ち主かも？」

正夫：「どうして、そう思った？」

越美：「正夫が闇の魔法使って、正一が光の魔法使っていたから」

アルス：「確かにそうかもしれないな。ためにやってみる。」

正一：「わかりました。正夫行くぞ」

正夫：「おう」

正夫は闇の魔法ダークホールを繰り出した、それと同時に正一は光の魔法シャイニングホールを繰り出していた。すると技が交わるどころに渦ができていた。

和己「見て、渦ができています。私、飛び込んでみるよ。」

と言ってすぐに飛び込んだ。

アルス：「ちよつとは待てよ、危ないだろ。光闇無効化シールド」
シールドを和己対して発動した。

和己：「ありがとうございます。では行きまーす。」

と突っ込んでいった。渦の中にはなんと、神の城の中につながっていた。和己は1人で中に進んだ。

アルス：「もういいだろう、お前たち魔法やめ」

正夫と正一は魔法をやめた。

正一：「和己はどこにいるの？」

越美：「和己なら、あんたたちの技の中に突っ込んでいったのよ。

アルスさんがシールド張ってくれたからいいものの、和己は、渦の中に消えていった……」

正夫：「なんだって」

越美：「和己大丈夫だろうか？」

と心配するみんなでした。

神の城の中で（後書き）

次回、和己神の城の中探検

和己 神の城の中で

和己：「ここどこなんだろう。城の中みたいだけど、私一人なの？
と周りを見渡したが誰もいない。」

和己はとりあえず歩き出した。城の外に出ればみんなに会えるとおもうから。

けど、行けど行けど出口は見つからない

和己：「どうしよう、ここから出られないよ。よし、あれやってみよう。転移魔法ルーラ」

と唱えては見たが、何かにかき消されたみたいで発動しなかった。

和己：「どうして、まさか、神の城の中だから、魔法は使えないってこと？」

和己は考えていた。どうすればここから出られるのか。しかし思いつかない。考えていてもしょうがないから和己は歩き出した。すると、モンスターに出くわした。

和己：「何よ、こんな時に出なくてもいいんじゃないの」

モンスターは容赦なく攻撃を繰り返してきた。和己はそれをすべて切り落とした。そしてその場から逃げることを選択した。

和己は、モンスターの反対方向に向かって走っていった。

和己：「今、敵う相手じゃないでしょ。」

そのとき、どこからか、なぞの声があった。

謎の主：「そのまま、まっすぐ進んだ先の行き止まりを右に曲がりすぐ、左の部屋に入りなされ、城の主が現れるから」

和己は声の主の声にしたがって、その部屋に入った。

その部屋には、先ほどの謎の声の主がいた。

和己：「あなたは、誰ですか？」

謎の主：「私はこの城の主、ザ・ゴッドだ。この城に入れたということは、相当な力の持ち主じゃないと入れないはずなんだが、お前は どうして入れたんだ？」

和己：「私の名前は斉藤和己です。友達の光の魔法と闇の魔法の間に突っ込んでいったらここに入っていました。」

ゴッド：「まさか、あの暗号の意味がわかったのかね。それはすごいな。」

と言つてゴッドは驚いていた。

和己：「あの、私、みんなの所に戻りたいんですけど、どうすれば戻れますか？」

ゴッド：「和己とやら、お主の力を見てみたい、体力・魔力を全快にしてやるから、今から、私と勝負してみないか？」

とゴッドは和己に勝負を仕掛けてきた。

和己：「もし、私が勝てたら、ここからの、出方教えてください。」
和己とゴッドの勝負が始まった。もちろんゴッドの宣言どおり和己の体力・魔力を回復してからだ。

和己：「私から行きます。水の魔法ウォーターホール」

ゴッド：「その攻撃は効かん、水魔法分解ライトスプラゾン。この攻撃でお前の水の魔法は無効となり、おまえ自身が水の魔法を使うと雷が降り注ぐことになる。これで、お前の、水の魔法は封じた」

和己はこの人かなり強い、私じゃ歯が立たないと思つていても、勝負なんだから、逃げてはだめだと思ひ

接近戦に持ち込んだ。

和己：「ならこれならどう、束縛魔法捕縛結界&水の魔法シールドスクランブル&水の魔法ウォーターホール&雷の魔法稲妻ソード」

和己は考えていた、これなら、まずシールド2つで雷は何とか防げて残りの2つで相手に攻撃が決まれば

かなりの大ダメージが期待できるはずだと。しかし現実は大きく違つた。まずは雷の威力が半端ないこと

まあ、水のシールド張つてんだからしょうがないか、そのための束縛魔法なんだけどなあ、攻撃は攻撃で

全然効いてないみたいだし。

ゴッド：「お前の力はその程度なのか、次で決めるとするか。究極心電奥義ライトニングホールド」

和己はこの攻撃をもろに受けてしまって、倒れてしまった。

ゴッド：「転移魔法ルーラ発動」

そういつて、和己をどこかに飛ばしてしまった。

和己 神の城の中で（後書き）

次回和己との再会

和己との再会

和己は、目を覚ました。

和己：「ここ、どこ？」

和己はあたりを見渡していた。自分はどこかの部屋にいることに気が付いた。

和己：「そういえば、私、あのゴッドとかいう人に飛ばされたんだっけ？」と独り言をいいながらベットから体を起こした。

すると、部屋の扉が開いて、私は驚いた、なんとみんながいたからだ。私は、みんなに声をかけた。

和己：「おーい、みんな、おはよう！ごめんね、みんなにいつぱい迷惑かけて」と私は頭をさげた。

越美：「もぉーほんとーに心配したんだからね、で何があったの？」

正夫：「俺も聞きたい」

正一：「俺も」

アルス：「私もだ、私がお前に突っ込めっていたんだからな、詳しく聞かせてもれうぞ」

私は、あの城の中で起こったことを全部みんなに話した、ゴッドのことも全部

アルス：「やはりそうだったのか、和己の話で全部がつながったよけど、まだ確信があるわけではないんだけど、ほぼ100%だと思っっている。もう少ししたら、みんなに話すから、待っていてくれないか？」

アルスはみんなにそういった。

私たちは首を縦に振った。

アルス：「和己、まだ疲れているだろう、今日もゆっくりと休みなさい。越美はこれから、私と一緒にあるところについてきてもらいます。詳しいことはついてから話します。」

越美「？、わかりました」

正夫：「あのー俺たちは？」

アルス：「ああーすまん、お前たちは和己の看病をしてあげなさい。」

正夫：「はい？それなら越美のほうがよくないですか？俺たち何もできませんよ？」

アルス：「さつきも言ったけど越美にはちよつとついてきてほしいところがあるから、あんたたちに頼んでるんだよ。夜には帰るから心配しなくても大丈夫だ」

正夫：「わかりました。和己、俺たち何にもできないけど、体調早くよくなつてよ。」

和己：「ありがとう」

と私は言った。越美はなんだかさみしそうにしている、今度は私が行く番なのみたいな顔になつていた。

アルス：「では、越美、今から行く支度をしてきなさい、1時間後にこの場所に来なさい」と言った

越美：「わかりました」

1時間後 越美とアルスは宿のロビーにいた。

越美：「あのー今からどこに行くんですか？」

アルス：「心配するな、あぶないところじゃない、それに私がいるから安心しなさい」と言つて移動呪文を唱え始めた。

アルス：「移動呪文テンペスタールート神の城ゴッド」

越美：「神の城!!!」

越美は思った、アルスはゴッドつていう人を知っているんだと。でも、なんで私だけなのという疑問も浮かんだ。

神の城の中に着いた。アルスはゴッドを探してくるといつてどっか

に行ってしまった。私はここがどこかわからないためそのままここにいた。和己のこんな気持ちだったのかな？

それから、数分後にアルスがゴツドを連れて戻ってきた。

アルス：「彼が和己の話していたゴツドだよ」

越美：「初めまして、斉藤越美です。和己とは双子の妹です。でも妹にあんなひどいことしなくてもよかったですんじゃないですか、和己は丸3日寝ていたんですから。」

ゴツド：「それはすまなかった。でも外に追い出すには相当の魔力がいるんだここでは特にねだから、疲労がものすごくたまっていただけだよ。それに越美だっけ、きみの魔力ももう半分以上消費してるんだよ」

私は驚いて自分の魔力を確認してみた。するとゴツドの言ったように、どこにも動いていないのに、魔力が半分に減っていた。それにも体もだるい感じがする。

ゴツド：「これはこの神の城の影響なんだ、だから俺は、和己に勝負を仕掛けて、和己を倒してから外に出したんだ。」

越美：「そうだったんですか。なんで倒れているのかやっと納得しました。すみません、和己が迷惑かけて」

アルス：「和己の話はそのくらいでいいだろう。それよりゴツド、お前ならあの二人の光と闇の攻撃くらい城のシールドで十分じゃなかったのかそれをわざとほどこきやがって、なんか、あいつらの中に光るものがあつたのか？」

越美：「えっ？どういうこと？和己といい、私といい、正夫や正一まで？」

ゴツド：「君たち4人はこの世界じゃないところから来ているよね。」

実は君たちにやってもらいたいのはこの城のシールドの再展開なんだ。俺一人でも十分なんだけど、俺はもうすぐこの場所からいなくなるというけないんだ。それで、アルスに頼んで、アルスの母校の先生にいい生徒はいないか聞いてみてくれないか、と頼んだら。君たちが推薦されたんだ。」

越美：「あのーもう少し詳しく教えていただけませんか？何が何だかわからなくて？」

ゴツド：「では、なぜこの城ができたのかを話そう、今から100年以上も前の話になるのだから、この世界と君たちの世界は昔は一つだったんだ、それが、あるとき、大きな戦争が起きて2つの世界に分かれてしまった。そして、こっちの世界では神の城がこの世界を守り、君たちの世界では君たちが通っている学校が君たちの世界を守ってるんだ。たぶんだけど、君たちの世界にとてつもないモンスターが現れたことは覚えているかい？」

私は頷いた

ゴツド：「あれは、こちらからの侵略だったんだ、でも、君たちの先生や仲間が協力して倒したよね。」

しかも、その時の話じゃ先生たちは、学園を守るので手一杯だったそうだが、君たちはその当時の実力では適わないと思って一瞬だけでもモンスターの攻撃を君たちのほうに向くようにわざとそのモンスターにその時できる最大限の攻撃魔法を使っただろう。それが効いたから、モンスターは君たちの方向に向くことで一瞬のすぎが出来先生たちと入れ替わることができて、あのモンスターを倒すことができたんだ。」

私はかなり驚いた、だってゴツドの言っていることが全部事実だったんだから

ゴツドは話を続けた。

ゴツド：「あの戦いがあったから、この城のシールドは崩壊してい

った。私はほかの人にはれないようにシールド張り続けていた、しかし私とて限界があるだから、君たち4人なら大丈夫だと思いいこの世界に呼んだんだ。では、私はこれで失礼するよ、今日、みんなで話し合いをして、そうだな3日後に神の城の前で待ち合わせはどうかな、アルスいいよな？」

アルス：「ええかまいません、越美はこれから戻ってみんなにこのことを簡単に説明した後すぐに寝なさい。詳しいことは明日の話し合いの時に言いますよ」

越美：「わかりました、ゴッドさん、私たちが何ができるかわかりませんが、できるかぎり頑張ります。ではさようなら」

と言ってアルスの移動呪文で宿に戻ってきた。

和己との再会（後書き）

次回4人の運命と選択

4人の運命と選択

越美は部屋に戻って来て、神の城の事をみんなに話した。

越美：「と、言うわけで、明日の朝、アルスから詳しく話があると思うけど、簡単に説明しとくね。」

正一：「わかった。和巳はどうする？起こした方がいい？」

越美：「いいえ、起こさなくても大丈夫よ。和巳なら心配無いから、それより、心配なのがあんたたちだから。」

正夫：「どういう意味？」

と正夫は聞き返した。

越美：「あんたたち、魔力はどのくらいあるの？」

正一：「俺は150」

正夫：「俺は、130」

越美：「私たちの半分もないわけ」

越美は呆れてものが言えないようだ。

正一：「悪いかよ、なら、越美はどのくらいあるんだよ？」

越美：「私は、420だけど。ちなみに和巳は400だよ」

正夫：「わかったけど、なんで魔力のこと聞いたの？」

越美：「今から説明する。神の城の中では常に魔力が減っていくみたいなの。私が神の城の中にいたときも消耗はすごかったからあん

たたち耐えられるかわからなかったから聞いたの。
ちなみに、1分あたり魔力が15減っていくから。」

正一：「かなり消耗はするみたいだな。まあ、そのぶん頑張ればい
いだけだろ。」

正夫：「まあ、確かに」

正一：「今日は越美も疲れただろうから、今日はもう、休んだら？」

越美：「そうさせて、もううわ。お休み」

正夫：「お休み」

そういつて、正一と正夫は部屋を出て行った。

次の日・・・

アルスから、4人は神の城の状態について、話を聞いた。

アルス：「皆も知っているかと思うが、今現在、神の城のシールド
がかなり弱っている状態だ。そこで、君たち4人には、新たなシ
ールドの再展開をやってもらいたい。かなり、厳しい作業になると思
つてくれ。」

4人はうなずいた。

その後、アルスは4人を連れて神の城の入り口に来ていた。

アルス：「今から、君たち4人に石を渡す。これから行く場所で、
その石を置いてもらい、はじめなかった人が、その場所であるこ
とをしてもらいたい。」

4人それぞれ、別の場所になると思うが心を一つにしないと、シ
ールドは再展開しないから頑張ってくれたまえ。」

4人：「はい、頑張ります。」

アルス：「では、今から、神殿に連れて行く。そこで、先ほど説明
したことをやりなさい。ルーラ」

4人の運命と選択（後書き）

次回、神殿での4人の試練

神殿での4人の試練

アルスは、移動魔法を使って、1つ目の神殿にみんなを連れてきた。アルス：「では、先ほどの石をこの神殿の4つの石のうちの真ん中に置きなさいさすれば、答えが導かれるから」

4人は、石をアルスの言われた通りの置くと、石が光始めた。

和巳：「これは？」

越美：「それぞれの石が別の光を発していて、それが、神殿の石と連携して光ってるんだ！」

アルス：「自分の石は覚えているか？」

4人はうなずいた。

アルス：「なら、自分の石を取りなさい。」

そういつてみんなに石を取らせた。すると…

正一：「うわっ！なんだこれは、転移魔法が発動したぞ。」

正一は驚いて、アルスの方を見た。

アルス：「気にしないで、その転移魔法は、その持ち主の本当の所に連れていくから。」

そういつてみんなにを安心させた。

4人行き先は、

正一……北の神殿
正夫……今いる場所、東の神殿
越美……南の神殿
和巳……西の神殿
に送られた。

アルス：「これから、大変だろうから、私は、サポートに専念、させてもらうよ。」
正夫：「はい、
よろしく願いします」

神殿での4人の試練（後書き）

次回から、

4人の神殿での話になります。

まずは、北の神殿の正一からスタートします。
では次回

正一、北の神殿へ

正一、北の神殿へ（前書き）

久しぶりの更新です

正一、北の神殿へ

転移魔法で、北の神殿にやって来た正一は、何をしていたのか分からず、途方にくれていた。

正一：「一体何をすれば、いいんだよ？」

とキレた口調でぶつぶつ言っていると、突然、何処からか、声が聞こえてきた。

????：「お主がここ、北の神殿に選ばれた者か？」

正一：「はい、そうです。あなたは、誰ですか？」

????：「これは、すまなかつた。私の名前は、ベール。この神殿の神様みたいなところだ。ところで、正一とやら、お主がここ来て、何をするのか、言ってなかつた様だから、伝えるぞ。」

正一：「はい」

ベール：「まず、言っておきたい事がある。」

これは、とても大切なことだから忘れないで欲しい。」

正一：「わかりました。大切な事とは？」

ベール：「うむ、今から、この神殿に新しいシールドを張ることは聞いているな？」

正一はうなずいた。

ベール：「その力を発揮するためには、お主を含めた4人の力を合わせて、さらに、全く同じタイミングで、4つの神殿の中心に魔法

を使ってシールドを展開させないといけないんだ。ここまでは、
わかったかな？」

正一：「なんとか」

ベーレ：「でも、まだ、お主たちは魔法を使うための力がまだ、た
りては、いないようだから、4人にそれぞれの神殿に送って、力を
つけてもらおうと思った訳だ。」

正一は、確かにそうだと思った。

正一：「俺は何をすればいいんですか？」

ベーレ：「まずは、基礎体力の向上と魔法力の向上を最優先します。
儀式は今日を含めて、半年後の2月29日に行われます！」

正一：「半年しかない、ということですね。わかりました。精一杯
頑張らせてもらいます。」

正一、北の神殿へ（後書き）

次回、正一の特訓 その1

正一の特訓 その1

ベーレ：「では、基礎体力テストを行う。」

正一：「はい。」

ベーレ：「これは、今、お主がどのくらいの力を持っているのかを調べるためにするものだから、精一杯やること。まずは、マラソンからいくぞ。時間はキロ3分以内に走る事、記録はキロ3分以上になつたら終了となり、

それまで走っていた距離が記録となる。わかつたかな？」

正一：「はい。わかりました。」

はあく疲れそうだな

何はともあれ限界までやってみよう。

ベーレ：「では、マラソン、よーい、どん」

ベーレの掛け声で、俺は走り出した。

まず、最初の1キロは2分55秒

次も同じくらいのペースで進み、6キロを過ぎた地点で、かなり急の上り坂に入った。

ベーレ：「上り坂は3キロある。これは、キロ5分以内とする。逆に下り坂はキロ2分以内とする。」

ベーレの声が突然聞こえてきた。

俺は山道もなんとかクリアして、もうかれこれ40キロは走った。

そろそろ、限界が近付いてきたみたいだ。

俺は、57キロの地点で3分10秒となりベーレがストップをかけた。

ベーレ：「なかなか、やるではないか。」

正一：「はあ、はあ、ありがとうございます。まだ、テストはあるんですよね？」

ベーレ：「ああ、あるけど、まずは、体を休めなさい。3時間後に次のテストを行う。」

正一の特訓 その2

正一が体力回復に努めていると、ベールがこっちにやって来た。

ベール：「どうかね、次のテストは、行けそうか？ ちなみに次は魔法力のテストだから。テスト内容は、私の出す魔法をすべて、無効か弾き返す事。」

正一：「なんか、難しいですね。弾き返すならなんとか出来るかも。よし、体力戻ったし、テスト行けます。」

正一の体力は満タンでは、無いものの、魔法を全部使えるほどの体力まで回復した。

ベール：「そうか、では、魔法力のテストを始める。まず、雷の魔法、ライトニングシュート！」

正一：「地の魔法デルス。これで、雷の魔法は無効ですね。」

ベール：「これは、簡単な小手調べだ。次はどうかな。氷の魔法、ヒョウザンブリザードバースト！」

正一：「氷の魔法には、火の魔法だ。ファイアーエクステンド。」

しかし、ベールの氷の魔法の威力が強すぎるために、こちらの魔法が呑み込まれそうだ！

正一：「追加の、火の魔法、ファイアースプラッシュウォーター！
！」

なんとか、氷の魔法を弾き返す事に、成功した。

ベール：「そこまで。お主の力はだいたい、わかった。今日は、ここまでにしよう。明日から地獄の特訓を開始するから、頑張るよう
に。」

ちなみに、現段階で、お主の力は、この神殿に必要な力の40%つ
てところだ。」

正一：「40%ですか…。」

これからの、特訓でどこまで、正一は力を伸ばす事が出来るのでし
ょうか？

正一：「出来る限りの努力をします。明日からよろしくお願いしま
す」

正一の特訓 その2（後書き）

次回 正一地獄の特訓 その1

正一 地獄の特訓 1

正一がこの神殿に来てから、1ヶ月が過ぎた。

正一：「ベーレさん、他のみんなは、今どうしていますか？」

ベーレ：「他の人達も、弱点の克服と新しい魔法の特訓を始めているよ。」

正一：「新しい魔法！！それって何なんですか？僕には、教えてくれないのですか？」

ベーレ：「はあく、何をいつておるのか、わからんが、お前さんは他の人達に比べて元々からレベルが高かったから、新しい魔法なんか覚えなくてもいいくらいの力を持っているわい。それにお主は、どちらかといえば、他の皆に、力を分け与えないといけないから。体力訓練を主にしているのだ。」

正一：「じゃあ、俺が1番重要と言うことですか？」

ベーレ：「ああ、そういうことで特訓を再開する。」

正一は自分に責任がまわってきたことで、さらに力をつけたいとおもって頑張った。

正一：「皆は、どんな、新しい魔法覚えたのかな？」と考えながら、練習をしていた。

ベール：「3日後に1度、他の人と1度会わせるからな。この時に、正一が力を分け与えるタイミングを教える。体で覚えるのだ。」

正一：「はい。」

みんなに3日後に会えることがとても俺は、嬉しかった。

正一 地獄の特訓1（後書き）

次回、4人の合同練習

4人の合同練習

正一はベールと共に、東の神殿にやって来た。

正一：「今日は、皆と合同練習をするんですよね？」

ベール：「そうだと、前にも言ったが今日は、皆に力を分け与えるタイミングを教えるからな。」

正一とベールが話していると、正夫とアルスがやって来た。

正夫：「よー、久しぶり！！元気してたか？」

正一：「ああ、元気だよ。」

ベール：「アルス、久しぶりだな。」

アルス：「久しぶり。」

正夫と正一が神殿での出来事を話しているうちに、和巳と越美もやって来て。久々に全員が揃ったところで、アルスが言った。

アルス：「みんな、久しぶり。今日はこの1ヶ月の成果を見せてもらおうと思う。はつきり言って、今日の練習で自分たちの足りない部分があるのかなか、探して、次回の合同練習迄に、良くする事が目的だからな。」

4人：「はい」

アルス：「では、ベール説明を頼む。」

ベール：「では、今から、君達にやってもらいたいの、新しい魔法を教わったと思いますが、それを使って、アルスと私を倒してください。私たちからは攻撃はしませんが、魔法は使いますので注意してください。以上です。何か質問は？」

越美：「私たちは4人で倒せばいいんですか？」

ベール：「そうだとも。ちなみに、魔法は全部使っていていい。制限時間はない、私たちが倒れるか、君達が倒れるかまでするから。」

4人の合同練習 part 2

4人は一斉に魔法を使い始めた。

正一：「俺は、魔法は補助魔法パワースプリット。これで、みんなの攻撃力を上げさせてもらったよ。」

正夫：「サンキュー、いくぞ！攻撃魔法！！サンダーブリザードバースト！」

越美：「ありがとう。私は攻撃魔法！！ファイアースプラッシュウオーター！！！」

和巳：「いくよ。サンダーウィルスバースト！」

3人はアルスとベーレに向かって攻撃を始めた。

ベーレ：「アルス、ひとりで大丈夫だよな。」

アルス：「ああ、今のところは大丈夫だ。」

ベーレ：「なら任せた。私は、正一の補給のタイミングを教える為に行ってくる。」

アルス：「ああ、行ってこい。」

アルスはそう言って、ベーレを正一の元に行かせると同時に、シールドを展開した。

3人の攻撃はアルスのシールドにすべて、弾き返されてしまった。

正夫：「全然効いてないし！」

和巳：「全く、受け付けてないみたいに、弾かれたね。」

越美：「そうだね。あれっ？正一？どうしたの？」

正一：「みんな、どうしたの？なんか弱く感じたのだけど。」

正夫：「そうか？俺は、魔法力アップしたはず、なんだけどな？」

越美：「私も頑張ってるんだよ。正一の力が強すぎるんだよ。」

和巳：「私だって、一生懸命にやっているのに、そんなこと、言わないですよ。」

みんなは、口々に、正一に言った。

そこに、ベールがやって来た。

ベール：「いきなり、攻撃しても、あのアルスのシールドは、やぶれないよ。みんなの心を1つにして、さらに正一以外の3人には、アルスから、新しい魔法を教わったはずだよな？なぜ、使わなかったのかな？」

ベールは3人に聞いた。

正夫：「まだ、10回に1回成功する確率なので、失敗するのが、怖かったです。」

正一：「失敗するのが怖い？ふざけんな！俺なんか、今日、この場で、みんなに魔力を供給するタイミングを、ベールから教えてもらうのに、その為に、こちらの方に来たんですよね？」

とベールに聞いた。

4人の合同練習 part 2 (後書き)

皆さま、新年明けましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

次回 4人の合同練習 part 3

4人の合同練習 part 3

ベール：「ああ、そうだとも！」

とベールは正一に言った。

ベール：「供給のタイミングは、3人の新しい魔法の力を見ないとわからないので、今度は、3人は、新しい魔法で、アルスに攻撃してくれ！」

3人：「はい。」

と返事をした。

ベール：「失敗しても、かまわない。どのくらい、消耗するのか、知りたいからな。」

正一：「俺は、今度は、見ておくからな！みんなの修行の成果を見せてもらうぞ！」

正夫：「ああ、いくぞ、新魔法！！エクスプレスサンダーバーストリミット！」

正夫の攻撃は雷の剣の形に変形して、アルスのシールドに斬りかかる。

しかし、アルスのシールドは、やぶれない。

ベールは正夫の消耗魔力を確認して、越美の消耗魔力を調べる為に、越美に言った。

ベール：「次は、越美、行ってくれ。」

越美：「はい。では、行きます。新魔法！ーブリザードエクスペスファイアー！」

越美の魔法は放射状に広がり、矢のように、アルスのシールドに降り注いだ。

しかし、アルスのシールドはびくともしない。

ベール：「次は、和巳、行ってくれ。」

和巳：「はい、私の新しい魔法は、ウッド、ウォーターエクスペス」

和巳の魔法は、木の幹を、伸ばして鞭のように、攻撃した。

しかし、アルスのシールドはやぶれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8475p/>

学園ストーリー

2012年1月2日11時46分発行